



「見たり、聞いたり、探ったり」 No.255

通算 No.406

青 木 行 雄

国登録文化財

台東区(浅草) 竹屋の「土蔵」

この「土蔵」は現在浅草雷門で「ギャラリーエフ」内にあり、展覧会や演奏会の会場として使用され、1998年(平成10年)頃より、国内外のアーティスト等が集う店として愛されてきた。土蔵は1868年(慶応4年)8月に竣工されているが同年の9月8日には明治に改元されたので、この蔵は江戸時代から、明治、大正、昭和、平成、令和と6時代を通りぬけ、153年間の長きに渡り浅草の町を見守って来たという守神的存在である。

橋本長四郎氏は橋本家の9代目で、同家は代々当地で材木商を営んでおり、屋号は「竹屋」と称していた。初代長四郎は1781年(天明元年)に逝去、2代目長四郎は1823年(文政6年)、3代目長四郎は1841年(天保12年)、4代目長四郎は1870年(明治3年)にそれぞれ逝去された。

現在の雷門の町は江戸時代以来浅草材木町と呼ばれる浅草寺領の町屋であったが、1934年(昭和9年)浅草材木町他12ヶ町を整理統合して浅草雷門一、二丁目となり、1965年(昭和40年)さらに雷門一、二丁目となった。浅草寺領は雷門の前が浅草広小路となったために寺領が分断されたが、門前町は雷門から先の駒形まで続いていたようである。関東大震災後、材木屋は木場に移転して材木屋もほとんど無くなり、その代わりに金属を扱う店がこの付近に多く集まったようである。

「竹屋」の5代目は1893年(明治26年)没、6代目は1901年(明治34年)に没、7代目小三郎(後に長三郎に改名、1925年(大正14年)・没)と続いたが、以後は番頭に任せて全国木材組合の組合長まで勤めたという。8代目永野鱗吉(養子、1943年(昭和18年)没)は、建築家、9代目長四郎は学者、現在10代目、和



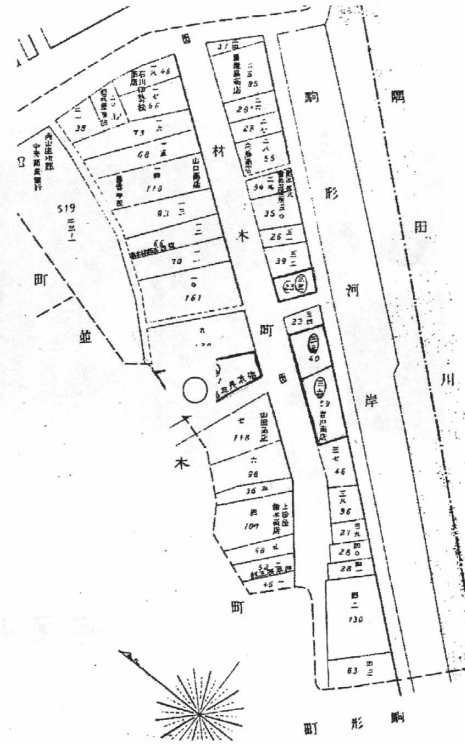
さすがに平日の昼間コロナ禍の中人出が少ない。浅草の雷門浅草寺の門前、この近く2～3分の所に「土蔵」はある



浅草の仲見世通り、平日の昼間、ほとんどがシャッターを降ろし、人けがない。2021年4月27日、コロナ禍の最中であつた。こんな閉惨な風景は過去見たことがない



江戸時代の材木町絵図 ○印が竹屋



右図 明治時代土地台帳



関東大震災後の浅草の焼け跡。手前のビルがデンキプランで有名なビルで奥の小さな建物が「土蔵」の竹屋である

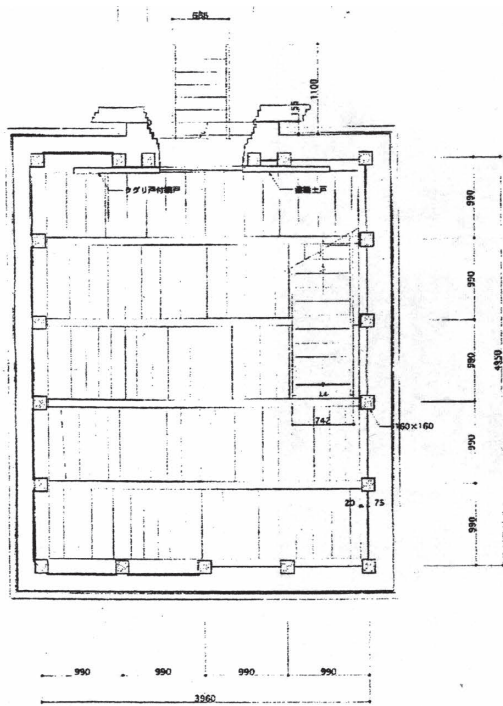


隅田川にかかる橋と浅草の震災風景

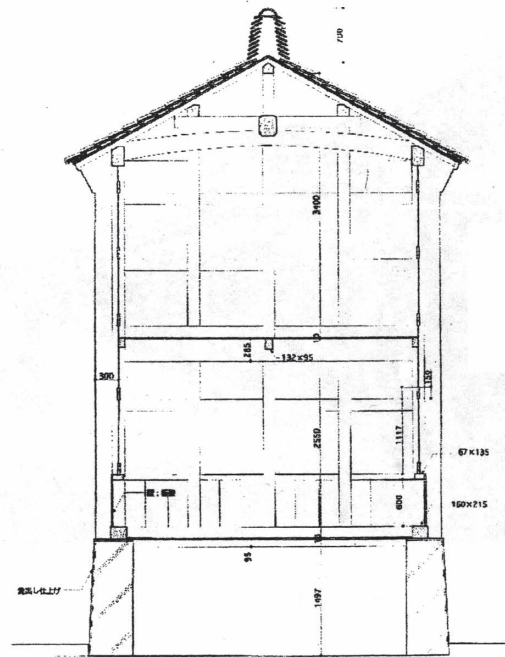
幸氏は医者となっている。

1931年(昭和6年)以前の「竹屋」時代、店や屋敷はどのように建てられていたのか明らかではないが、江戸時代の絵図や明治期の家屋台帳などから推定すると、竹屋は隅田川の駒形河岸沿いに店(材木置場)があって、通りを挟んで西側に店舗と屋敷があったと思われる。家屋台帳には「材木町 地番八 一七一坪 橋本長三郎」と河岸沿いに「地番三五 二三〇坪 橋本かめ(6代目妻)」「地番三六 四〇坪 橋本かめ」「地番三六 五九坪 橋本竹次郎」の名義で所有しており、地番八には店舗と住まいがあったとみられる。これらを見ても当時かなり大きな材木屋であったと思われる。

関東大震災後この屋敷地前面は道路拡幅のために削られ、南側の角地が売却されたため(株)淵川金属が借地した土地は28坪となっている。



土蔵 平面図（改修前）



断面図

この土蔵はその屋敷地の西側に建てられていることから、東側の道沿いに店舗があってその奥に住まいと蔵が建てられていたことになる。土蔵が地上から1.5m（5尺）に床がある高床式になっているのは、隅田川沿いは絶えず大水に悩まされていたためであろう。家財でも大切な書類や貴重品を収納した、いわゆる文庫蔵や金庫等の内蔵と呼ばれた蔵である。

1923年（天正12年）の関東大震災で浅草周辺の街区は地震でも倒壊しているが、その殆どは火災で焼失した。橋本家も店舗や住まいは焼けてしまったが、土蔵だけが奇しくも燃えずに残った。震災後橋本家の店は番頭に任せて、一家は成城学園に移転し、土地は借地とした。

そして、1931年（昭和6年）以後淵川金属事務所がその土地を借りて事務所となったが、1945年（昭和20年）3月の米軍の東京大空襲によって浅草一体は全焼、事務所も焼けたが土蔵は奇しくも再度焼け残ったのであった。1949年（昭和24年）ようやく土蔵の前に事務所を木造で再建した。この時に基礎の石積みにはモルタルを塗って補強をしたようである。

蔵は妻入りの木造二階建てで、棧瓦葺き、間口2間、奥行2.5間、京間寸法で建てられている。京間の1間は6.5尺で普通の関東間より0.5尺（15cm）広く、江戸では大名階級の屋敷や豪商の居宅には使われていたようで、材木商を営んでいた当家では屋敷の造りも上方風に豪勢なものに造ったのであろう。しかも使用されている木材は無節の桧材で、柱径は16cm角（5.3寸）で太い。また、柱に通された横材の梁は成（高さ）もあって厚く、極めて堅牢な軸構造となっている。

土蔵の壁は厚さが約30cm以上（1尺以上）あり、極めて丁寧に塗り込んであり、関東大震災にも耐え、



ギャラリーエフ内の店と奥に土蔵の入口が見える



「土蔵」の入口、「扉」嚴重で30～40cm ぐらいある

二度にわたる火災にも持ち応えたのであった。それは壁下地の木舞(こまい)が木製の木木舞で、関東で一般に使われる竹木舞でなかったことによると思われる。しかもその緊結には藁縄を使わず、棕櫚縄が使われていたので極めて丈夫であった。

屋根瓦も棟の鬘斗瓦は9段積まれて立派な造りであり、それに対応して大きな鬼瓦が使われている。鬼の彫りも良く、焼きも良い。瓦には裏に刻印が見られ、「尾洲 本場窯元製 別製納入知多常滑 改無頼甚左衛門」、鬼瓦には「錦屋□□ 鬼福 指定工場 三州別製」とあり、瓦は常滑焼の上質なもの、鬼は三州の鬼福の焼きである。

これらの刻印からすると、江戸時代ではなく明治期のものと考えるのが妥当で、いつ葺き替えられたのであろうか、検討を要する。



「土蔵」の内部天井、木組みの様子

さて、この土蔵の建立年代であるが、二階の梁下端に墨書で「慶応四戊辰八月吉日 三代目竹屋長四



棟の鬘斗瓦、9段積ですごい重みがうかがえる



鬼瓦で、すごく大きくすばらしい。常滑焼

郎 妻 い勢 倅 小三郎 建之」と記されている。しかし、三代目長四郎は先に記したようにすでに1841年(天保12年)に亡くなっており、1868年(慶応4年)より27年前のことである。妻い勢は明治14年に亡くなったが、この蔵はい勢によって建てられたことになる。倅小三郎は7代目を継いで長三郎に改称し、大正14年に亡くなった。



天井木組みの梁に、慶応4年等の墨書が書かれている

こんな経緯のある大変貴重なこの「土蔵」は、1931年(昭和6年)、所有者である橋本長四郎氏より借地として淵川金属の銀次氏が借用し、金属を扱う事務所を設立した。氏は若くしてドイツに渡って鉄工会社に勤務し、帰国後は神田岩本町にて金属の会社を経営していたが、関東大震災後の1931年(昭和6年)にここ浅草の地に移転したのである。その後1971年(昭和46年)この借地を購入し、父銀次の後を政雄が引継ぎ継続したが、1996年(平成8年)社長の淵川正雄氏が亡くなり、1998年(平成10年)4人の息女(代表村守恵子)によって「ギャラリーエフ」として受継がれ、20数年間国内外多くの芸術家のギャラリーや演奏会にも使用され、愛されて来た。

この「土蔵」の建主は屋号「竹屋」後には「竹長」とも言われたようである。持主の名前は、橋本長四郎という。そして譲り受けた人は、淵川金属の淵川銀次氏(先祖)であった。

この度この貴重な「土蔵」が再開発のため、取り壊しの運命が近づいている。

参考資料

台東区文化財保護審議会長

稲葉和也(建築史)資料より

2021年5月5日記